

## 日本薬学会学術活動の展望 Future Prospects of Scientific Activities in PSJ

松木 則夫 (Norio MATSUKI)

日本薬学会会頭 (President of PSJ)

昨年、日本薬学会会頭に就任した時に、以下の重点項目を挙げた。(1)新公益法人化への対応、(2)広報活動の充実、(3)学会活動の長期的展望の明確化、(4)薬学教育基盤整備への支援、(5)理事会構成員の多様化、(6)国際交流の促進、(7)他の学協会との連携促進、(8)学術誌の課題整理。そして、これらの項目を推進する三つの基本姿勢として、「情報の共有」、「多様性の確保」、「対外発信」を掲げた。(1)については理事会内で情報共有しほぼ完了した。(2)については広報委員会の活動内容を整理し、情報の発信対象を会員、高校生などの将来の薬学会員、国民の三つに分けて効率的な情報提供が出来る体制を整えた。育薬の重要性、薬の本質や薬剤師の関与を国民に説明するポスターを6万枚作成し、日本薬剤師会および日本病院薬剤師会の協力を得て全国に配布し、関係者から一定の評価を受けた。(3)については、将来展望委員会を中心に議論が進み、部会を主体とした薬学分野の将来展望について提言がまとまる目処がたった。(4)については、薬学教育改革大学人会議から独立した薬学教育協議会、薬学共用試験センター、薬学教育評価機構が実務を担う体制が整ったので、薬学会が取り組む新たな枠組みを検討中である。その一つが、薬剤師の生涯研修の場として役割発揮である。薬剤師の実務的な研修ではなく、サイエンスを前面に押し出した最新科学の習得と研究テーマの発掘の場としたい。教育部会の活動として既にスタートしている。さらに、六年制薬学教育における若手教員の負担が大きくなってしまっているの薬学会としてのサポート体制を構築していく必要があるであろう。(5)については、理事会構成メンバーに企業所属会員や女性会員が入るように新しい定款の運用方法を決めた。今年度の役員選挙から実施される予定である。(6)国際交流は薬学会全体の方向性を決める重要な施策であるが一委員会の活動では荷が重いので、国際交流委員会を理事会内委員会として、効果的な対策を迅速に実行していくことにした。(7)他の学協会との連携は、あらゆるチャンネルを通して実行している。特に、昨年末に行われた行政刷新会議・事業仕分けに対する意見表明は、30余りの学会とともに共同声明の発表、記者会見、政府への要望書提出を行った。これらの学協会とは今後とも国民に対して科学技術の重要性を訴えていく必要があることで合意している。(8)現在は会誌ファルマシアの他に四つの学術雑誌を定期刊行している。編集委員の献身的な努力のおかげでインパクトファクターは上昇しており、薬学会の顔になっている。しかし、国際化が進むにつれて新たな課題が生じており、また医療薬学分野の受け皿が十分ではないなどの問題点がある。学術誌検討WGを中心に議論が進み、原案をもとに会員から広く意見を求める段階である。こうした変革を通じて、より効率的に薬学の学術活動が推進されることを期待している。

今年度はこれらの重点項目を継続しながら、研究の面では引き続き部会活動の活性化を図っていく。部会は、薬学各分野の学術活動を担う緩やかな連合としてスタートした。当初の目的は達成されつつあるが、閉鎖的で“仲良しクラブ”的な側面も垣間見えるようになってきた。原点に立ち返り、透明性を高めて、日本の薬学を発展させる原動力としての部会活動を発展させていきたい。

日本薬学会の全ての活動は、『薬学の学術活動を通じて日本の医療及び科学技術の進歩に貢献する』と『会員に資する』観点から“仕分け”されなければならない。また、これらの目標を見失わなければ、今後の日本薬学会の活動方針は自ずと定まってくる。「若手が未来に希望が持てる薬学会」を作ること、我々の責務である。